
精神分析の技法と実践

ラルフ・R・グリーンソン著
松木邦裕監修
清野百合監訳, 石野 泉訳者代表

金剛出版, A5判512頁, 8,800円, 2024年11月刊

(法政大学・初台クリニック) 関谷秀子

本書は、ラルフ・R・グリーンソンの『The Technique and Practice of Psychoanalysis』の待望の邦訳書である。『The Technique and Practice of Psychoanalysis』は刊行以来、精神分析の技法を学ぶ上での重要な書籍とされてきた。評者が参加していた自我心理学派の研究会でも、この本を熟読し議論することが行われていた。英語の原書と格闘しながら学びを深めた方々も多いのではないだろうか。

『精神分析の技法と実践』は、精神分析の基本的概念の要約、抵抗、転移、精神分析状況の四つの章から構成されている。第1章では、催眠法以降の精神療法の歴史的変遷をたどり、技法に不可欠な理論的概念について解説し、分析療法の適応と禁忌について論じている。第2章では、抵抗の臨床的な現れや抵抗の理論と分類、そして抵抗分析の技法について、臨床事例と共に具体的に詳述している。グリーンソンは第3章に多くを充てているが、ここでは転移の歴史的概観、転移反応と転移抵抗の分類、転移分析の技法について解説している。グリーンソンは作業同盟 (working alliance) の概念を提唱したことで知られているが、分析家とクライアントの関係は、転移反応と作業同盟、そして現実の関係が相互に重なりあっている視点を持つ必要があると本章で述べている。転移分析の技法に関しては、転移の呈

示、明確化、解釈、ワークスルーの各段階について臨床事例と共に詳述しており、他書に類を見ない。その点において、本章は本書の中でとりわけ示唆に富んでいると言えるだろう。第4章では、精神分析が患者と分析者の双方に要求するものについて論じられており、分析者としての在り方についても考察されている。

『精神分析の技法と実践』の最大の特徴は、グリーンソン自身の臨床事例が逐語に近い形式で豊富に紹介されている点である。これにより、読者は体系的に整理した理論を、具体的な臨床場面でどのようにグリーンソンが実践しているのかを明確に頭の中で結び付けて理解することができるだろう。そして、これらの事例を自分自身の臨床経験と照らし合わせ、吟味できるに違いない。グリーンソンのアプローチについて疑問や批判を持つ読者もいるかもしれないが、それ自体が新たな議論を引き出し、精神分析の技法をより深く学ぶ契機となるだろう。本書は1967年の刊行であり、現代のアメリカで主流の関係精神分析に至る発展については読者が補う必要があるだろう。

なお本書では、グリーンソンの論理的で明快な語り口が見事に再現されており、臨床事例についても臨場感を損なわずに読み進めることができる。また頻回に登場するZ氏の事例については、作業同盟の形成、抵抗、転移のワークスルーの各段階が記述されているので、日本語で通読してみるのも面白いかもしれない。本書が刊行されたことで、膨大な内容を日本語で読むことができるようになったことは精神分析を学ぶ者にとって非常に有益である。丁寧な翻訳作業に携わった監訳者、訳者の先生方に深く感謝したい。

原書：Ralph R. Greenson : The Technique and Practice of Psychoanalysis